

尾形亀之助読書会通信

第一号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

はじめに

皆さん、一月二十一日は、お忙しいところ第一回尾形亀之助読書会にご参加頂きありがとうございます。正直、小熊自体、そんなに尾形亀之助の詩を読んだことはありません。一度、さらっと読んでみました。全集も持っています。かろうじて、思潮社の現代詩文庫の尾形亀之助を持っているだけです。大河原生まれということもあり、尾形亀之助という詩人に興味はあったので、秋元潔の著作物は手に入れて読んでいました。それももう二十年以上も前のことでした。どうして、尾形亀之助読書会を始めようと思ったのか、自分でもよくわかりません。自分なりに詩のことを突き詰めてゆきたいと思ったときに、自分一人で家に隠っていただけでは、広がりが無い、限界があるなと思ったことが、理由と言え理由でしょうか。他の人に刺激を受けたいと思っ

たのです。それで、自分の住んでいる町で何か出来ないかと思つて、じゃあ大河原で生まれた尾形亀之助のことで何か出来ないかと思つた次第です。この読書会は、「読書会」と書いていますが、静か本を読むただの会にはしたくないと思つています。第一回目の読書会で言いましたが、尾形亀之助の作品を通じて、詩というものを考えてゆくこと、詩的瞬間を味わうことが出来ればいいなと思つています。時には、尾形亀之助のことなど、そつちのけで違うことをやっても全然かまわないと思つております。でも、尾形亀之助の詩の魅力は、なかなか語り尽くせないものを持っているのも事実で、これから何十年とずっと尾形亀之助の作品を巡つて語り合うことになるのかもしれない。どうか、懲りずに末永くこの読書会とお付き合い頂ければ嬉しい限りです。

ただ読書会をするだけでなく、末端でも文字に関わる気持ちのあるものとして、なにかを残しながら読書会を行うことも、広がりということでは、何かに繋がるかなと思ひ、この通信を出すことにしました。皆さんも、なにか書いて頂ければ嬉しいです。読書会は隔月に開催します。なので、この通信も隔月で出したいと思つています。できれば読書会の間の月にとつておきます。第二号以降は読書会に来て頂いた皆さんに書いて頂ければ嬉しい限りです。

亀之助にまつわる話

二月三日に仙台にあるbook & cafe 火星の庭に行つたときに、店主の前野久美子さんから塩釜から出ている俳誌『小熊座』の編集長の渡辺（偶然自分が言つたときにそこにいたことが奇跡でした。）さんを紹介して頂き、少しお話しできる機会がありました。渡辺さんは、一度小熊座に尾形亀之助の俳句のことを書かれてさうです。結論は、面白くない俳句だと言つたことでした。父や祖父の影響で始めた俳句の尾形亀之助の俳号は、無臍子というものです。へそがないとは、親子のつながりのない自由奔放な子供とも読めます。作品の善し悪しは別にして、とても愉快な俳号だと思ひました。

翌、二月四日に、仙台の一番町の外れにあるぼうぶら

屋という古本屋に行きました。目的は秋元潔が出していた雑誌『尾形亀之助』を買うためです。それはさておき、店主の奥さんがおられて、亀之助の第二詩集『雨になる朝』の初版本の話をしてくださいました。それから、宮城県立図書館に売つたことでした。だから、宮城県立図書館に行けば、初版本の『雨になる朝』を手にとつて読めると言うのです。でも、宮城県立図書館のサイトに行つて、著者尾形亀之助と入力して蔵書検索をしても、『雨になる朝』は出てきません。どこぞやに秘蔵されているのでしょうか。幾らで売つたのか尋ねたのですが、ついで教えてくれませんでした。まだ、尾形亀之助は忘れられていないのですね。

最後に

今、現在（二月五日）新たに四人の方が次回の読書会に参加したいとの連絡をいただいております。お一人の方を除いて、皆さん、朝日新聞の記事を読んで連絡を頂きました。朝日新聞の日野さんには大変に感謝しております。物好き言えば物好きな記者の方です。

次回、第一回目に参加して頂いた方々に来て頂ければ、総勢九人となります。多分、会場は十二人くらいが限界かなと思つております。なので、もう少しです。この読書会が、回を重ねるうちには、尾形亀之助についての本を出している方や、絵を描いている方などに、亀之助の魅力に何か心を動かされたような人をゲストにお迎え願おうと思つております。そのためには、この読書会を長く続けてゆく必要があります。ちょっとした思いつきで終わらせたくない気持ちがあります。どうか、皆さん、よろしくお願ひします。

秋元潔が発行していた雑誌『尾形亀之助』は一号から十二号まであります。尾形亀之助のお子様や兄弟の方の文章や、小さな頃から一緒に生活したり遊んだことのある甥松良宣さんの文章など、いっぱい読み物があります。今度の読書会に持ってゆきますので、借りたい方にはお貸しします。

では、三月十七日を楽しみにお待ちしております。

（二〇一二年二月五日・詩誌『回生』小熊）